

# 建設産業の魅力化に向けて

戸田建設株式会社  
代表取締役社長

今井 雅則

はじめに、平成 28 年熊本地震によりお亡くなりになられた方々にご冥福をお祈り申し上げますとともに、被災された皆様に心よりお見舞い申し上げます。

## 建設産業の現状と課題

大規模自然災害に際し、改めて建設産業が担う役割の重要性を認識している次第です。緊急時の迅速な対応はもとより、災害に負けない社会基盤、安心して快適な生活環境の実現、こうした使命を自覚し、技術や技能の研鑽を重ねていかななくてはなりません。

一方、近年の建設産業を取り巻く状況は、大変厳しいものがあります。国内の建設投資額は 1990 年後半以降、減少傾向が続き、リーマンショック後の景気悪化によりピーク時の半分の約 42 兆円となりました。この間、建設業就業者数も同様に減少が続きました。

ところが、ここ数年、東日本大震災の復旧需要やアベノミクスによる景気回復、東京五輪の開催決定等が重なり、50 兆円を超える規模まで拡大しています。その結果、需要と供給のバランスが崩れ、労働力不足という事態が一気に表面化しました。直近では安定化しつつありますが、少子高齢化という大きな流れを踏まえると、生産性の向上、そして担い手の確保は、建設産業が取り組んでいかななくてはならない喫緊の課題であると認識しています。

## 担い手の不足

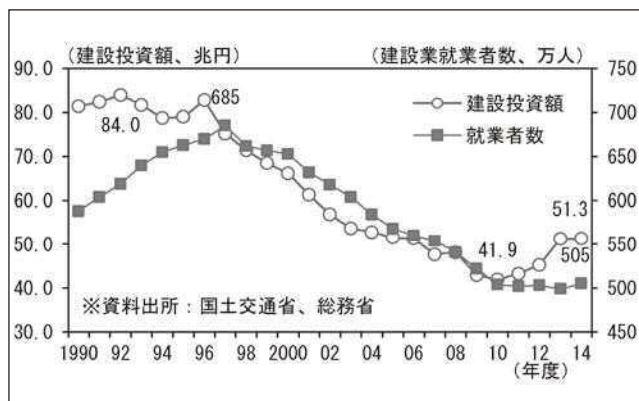
社長就任以来、全国の各支店への視察と合わせて、協力会社の経営者の方々との意見交換会を開催し続けています。その場でいただく意見や要望は、地域や職種によって様々ではありますが、共通しているのは「新卒採用がうまくいかない」「若手への技術の伝承が進まない」といった、担い手不足に関する事項です。

建設市場の縮小による影響もありますが、3K（きつい、危険、きたない）と言われる労働環境の改善が進まず、若者にとっては魅力のない仕事になってしまったのかもしれませんが、しかし、建設産業は労働集約型産業と言われるように、多種多様な職種による仕事の集大成として成り立っています。そこでは、人こそが財産であり、今後、人工知能等が飛躍的に発達したとしても、創造的な部分については人が主役であり続けると確信しています。

## 魅力化に向けて

魅力ある建設現場を目指して、現在、国土交通省を中心に「i-Construction」という取り組みが進められています。その中核となるのが、ICT 等の最先端技術の全面的導入による生産管理のイノベーションです。

当社をはじめ建設各社においても、モバイル端末やヘッドマウントディスプレイを活用した効率化、アシストスーツやド



建設投資額と建設業就業者数の推移



アシストスーツの活用

ローンによる省力化などが試行されています。また、ロボットによる無人化・自動化の技術開発も進められており、これによって生産性はもとより安全性も飛躍的に向上し、労働災害が絶対に起きない現場の実現へと近づくのではないかと考えています。

もう1つ、建設産業の魅力化に向けて欠かせないのが女性の活躍推進です。これまで建設現場は「男の世界」とされ、女性からは倦厭される環境にあったかもしれません。こうした労働環境を一刻も早く改善し、働く全ての人が、それぞれの資質や能力に応じた活躍の場が確保されるべきです。その中で、女性には「男の世界」の常識を否定し変えていく原動力となっていたらいいと思いますし、男性とは異なる女性ならではの感性や視点を、建設現場に限らず、設計や営業等の第一線で発揮し続けていくことを強く期待しています。

当社においては、2016年4月入社の人220名のうち47名(21.4%)が女性となっています。他の産業と比較すれば、まだまだ低いレベルにはありますが、これからも性別や国籍に関わりなく、意欲あふれる人材を積極的に採用していきたいと思っています。

### 建設産業の未来像

内需依存型の代表格とされてきた建設産業ですが、足元では国際化が着実に進展しています。日本の建設産業は、狭隘で自然災害の多い国土で培われた、世界に冠たる高度な技術力を保有しています。昨年、当社の海外法人があるブラジルで開催されたセミナーに、環境や病院建築に関する出展を行いました。日本の技術への関心の高さをうかがうことができました。

この先、世界人口は2050年までに100億人に迫るとも言われています。新興国の経済も、長期的な展望においては、先進国をはるかに上回るスピードで成長を続けていきます。人と地球環境が調和した、豊かな社会づくりに貢

献していくために、日本の建設企業の活動領域の更なる拡大が予想されます。

また、建設技術を応用することによって、新しい価値を社会に提示していくことも可能です。例えば、当社では2007年より浮体式洋上風力発電設備の開発に取り組んでいますが、これには鋼やコンクリートの技術が応用されています。実証事業や実用化段階においては産学官のコラボレーションが積極的に行われており、こうした場面では建設産業の付加価値の源泉であるアッセンブリー能力が活かされています。

これまでに培ってきた技術を基に、国境や産業の枠組を越えて活躍していく。そして、ICTやロボットを活用し、誰もがより創造的な仕事に従事していく。多様な価値観のもと固定概念を覆していくことで、そのような未来像が見えてくると考えています。

### おわりに

前回の東京五輪、その後の大阪万博など、私が育った時代には「躍動」「近未来」を感じることができた、大きな夢がありました。そうしたことへの憧れから建設産業の門を叩き、ものづくりに携わりながら社会に貢献できるという大変な喜びを感じています。

他産業の皆さんとのコラボレーションにより、旧来の建設産業に捉われない新しい創造の分野へのチャレンジもしてみたいと思っています。

(建築 昭和51年卒)



建設現場で活躍する女性社員



撮影：西山 芳一

浮体式洋上風力発電設備(長崎県)